HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	紀海音の謡曲利用一覧（上）
Author(s)	冨田, 康之
Citation	北海道大學文學部紀要, 47(3), 33-47
Issue Date	1998-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33724
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(3)_PR33-47.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

紀海音の謡曲利用一覧 (上)

冨田康之

はじめに

浄瑠璃の詞章に謡曲の文句を利用することは、限られた作者にのみ見られる方法というものではなく、むしろ一般的なものである。特に、時代物浄瑠璃が作品の「世界」を持つということは、初めから先行伝説・先行作品を再生産するという創作方法を傾向付けるものとなる。その場合、前提としてその先行伝説・先行作品は観客のよく知るところのものであることが重要となる。当時にあっては、浄瑠璃が人気の高い能を利用することは当然のことであったと言えよう。まして、能は音楽性豊かな舞台芸術である。構想のみならず部分的表現を利用することも非常に多い。浄瑠璃への影響は極めて強いものがある。

紀海音の浄瑠璃作品にも、近松門左衛門等と同様に謡曲を利用した詞章は多い。そこで海音の謡曲利用の実態を把

握するために基礎的調査を行なった。対象は海音の時代物浄瑠璃とした。また、謡曲に関しては便宜的に『謡曲大観』所収の作品と対照させることにした。今回は『謡曲大観』第一巻及び第二巻の『猩々』までの調査を報告する。記載順序は、利用された謡曲作品を掲げ、次に●印で謡曲の利用部分と、（巻数・頁）を示し、更に○印で海音作品の詞章及び〈作品名・段数〉を記すこととする。利用部分の典拠が謡曲及びそれ以外に重複して存する場合、前後の表現等を考慮して掲げた。また、表現の対応が短い場合でも「謡」等の節付がある場合は取り上げた。但し、前後の表現に対応しない場合でも、他の部分で何らかの謡曲利用が認められる場合、また利用の可能性が考えられる場合は【参考】として記した。尚、ここでの調査に関する考察は後日の課題としたい。

『蘆刈』

●昨日と過ぎ今日と暮れ。明日又かくこそ荒磯海の。（一・四九）

○【参考】きのふとすぎけふと暮行年月の〈鬼鹿毛無佐志鐙・第五〉

●雨に着る。田蓑の島もあるなれば。露も真菅の笠はなどかなからん難波津の春なれや名に負ふ梅の花笠縫ふてふ鳥の翼には鵲も有明の月の笠に袖さすは天つ少女の衣笠それは少女これは又難波女の。難波女の。かづく袖笠肘笠の。雨の蘆辺も。乱るるかたを波あなたへざらりこなたへざらり。ざらりざらりざらざらざつと。風の上げたる。古簾。つれづれもなき心おもしろや（一・五四）

○雨にきる。たみのゝ島も有なれば露もますげの。かさはなどかなからん。なには津の春なれや。何おふむめの花がさ。ぬふてふとりのつばさには。かさゝぎも有明の。月のかさにそでさすはあまつ乙女のきぬ笠。それはをとめ是

は又なにはめの〳〵かづく袖がさひぢがさの。雨のあしべのみだるゝかたをなみあなたへざらりこなたへざらり。ざらり〳〵さら〳〵ざつと。かぜのあげたるふるすたれつれ〴〵もなき心おもしろや。〈仏法舎利都・第四〉

○つばさみだるゝ波返へし。あなたへざらりこなたへざらり。ざらりざらざつと風のしらべるつくし琴。つれ〴〵もなく思ひもなき。翁が琴と御覧あれ義家きやうに入給ひさておもしろの詞やな。〈八幡太郎東初梅・第四〉

●目に見えぬ鬼神をも和らげ（一・六〇）

○【参考】目に見へぬ鬼神も。やはらぐるは和歌のとく。〈小野小町都年玉・第二〉

『葵上』

●寄り人は今ぞ寄りくる長濱の。蘆毛の駒に。手綱ゆりかけ（一・一五八）

○【参考】目高に見ればまがふ方あしげのこまに手縄くり。〈鎮西八郎唐土舩・第一〉

●三つの車に法の道。火宅の門をや。出でぬらん（一・一五八）

○三ツの車にのりの道。くはたくをいでぬ人心。〈仏法舎利都・第三〉

●あらはづかしや今とても忍び車のわが姿。月をばながめあかすとも。（一・一五九）

○【参考】皆まよひ道恋の道。忍びぐるまのわれながら。我ともいざやうば玉の。〈殺生石・第一〉

●人間の不定芭蕉泡沫の世の習ひ。昨日の花は今日の夢と。驚かぬこそおろかなれ（一・一五九）

○さるにてもはかなきは世の有様や。きのふの花はけふの夢さめてはもとの夢人よ。〈鬼鹿毛無佐志鐙・第二〉

●衰へぬれば。朝顔の。日影待つ間の。有様なり。（一・一六一）

○【参考】つとめの内は朝がほの日影待まの一盛。げに親方のえいぐは迄。〈山桝太夫葭原雀・第二〉
●われ人のためつらければ必ず身にも報うなり。何と歎くぞ葛の葉の恨みは更に、尽きすまじ（一・一六一）
○我人のためつらければはかならず身にもむくふなり。何をなけくぞくずのはの。うらみはつくることあらじとふしづみてぞ。泣ゐたる。〈鎌倉尼将軍・第四〉
●思ひ知らずや思ひ知れ（一・一六二）
○【参考】かりに此よのちぎりをなす。思ひしらずや思ひしれと。いふかと思へば〈殺生石・第一〉
●葉末の露と消えもせば。それさへ殊に恨めしや。（一・一六三）
○【参考】恨みと共にまさり草はずへの露ときゑうせし。ゐんぐはわ車の。我からと。〈小野小町都年玉・第五〉
●行者は加持に参らんと。役の行者の跡を継ぎ。胎金両部の峰を分け。七宝の露を払ひし篠懸に。不浄を隔つる忍辱の袈裟。赤木の数珠の刺高を。さらりさらりと押し揉んで。一祈りこそ祈つたれ（一・一六五）
○鈴ふりならし大音上。ゐんの行者の跡をおひ丹後の城をかけ出山。大岸三十三度の先立金胎両部の両腕両足。ときんはまんだらうぬらはあんだら。道なきやつらをふみわけ立てじゆずはいら高ねぢくひ。かき首。百八ぼんなふいなかに花聟都に花嫁。〈頼光新跡目論・第一〉
○出々加持に参らんと。稚武彦の跡をつぎ陰陽不側の旨をわけ。八ツ風を払う白ラはりに。非情をへだつる唯一のぬさ一色五色の幣帛追取。しん然として入来り〈花山院都巽・第四〉

『鵜飼』

●一殺多生の理にまかせ。かれを殺せといひあへり。（一・三〇四）

○【参考】時すでにいたりたり。一せつたしやうのりにまかせいそぎもりやをたいぢ有。〈仏法舎利都・第四〉

●隙なく魚を食ふ時は。罪も報いも、後の世も忘れ果てて面白や。（一・三〇六）

○【参考】罪も報も後のよも。〈末廣十二段・第二〉

『歌占』

●神心。種とこそなれ歌占の。引くも白木の。手束弓それ歌は天地開けし始めより。陰陽の二神天の巷に行合の。小夜の手枕結び定めし。世を学び国を治めて。今も道ある妙文たり占問はせ給へや。（一・三五五）

○神慮種とこそなれ歌占のひくもしらきのたつかゆみやたけ心か今川か面を人にしられしと髪おつさはき立えほし（中略）疑ふにはあらね共歌を引てうらなふこと。昔もためし候か粗物がたりいたされい。夫歌は天地ひらけし初より。陰陽の二神天のちまたに行あひの。さよの手枕結び定めし。世をまなび国をおこして。今も道有妙文たり占とはせ給へや歌うら問せ給へや〈傾城無間鐘・第四〉

●鴬のこは子なりけり子なりけり。（一・三六〇）

○【参考】枝をはなれし鴬や。子は子成けりほとゝぎす悦びの浦歎の浦〈鎌倉三代記・第三〉

●魂は篭中の鳥の開くを待ちて去るに同じ。消ゆるものは二度見えず。去る者は。重ねて来らず（一・三六四）

○世なをし〳〵くはばら〳〵玉しゐは篭中の鳥のひらくを待てさるに同じ。きゆる物は二度見へず。去ル物は重て来

らず。〈傾城無間鐘・第四〉

●ざんすゐ地獄の苦しみは。臼中にて（中略）剣樹地獄の苦しみは。手に剣の樹をよどれば。百節零落す。足に刀山踏む時は。剣樹共に解すとかや。石割地獄の苦しみは。両崖の大石もろもろの。罪人を砕く次の火盆地獄は。頭に火焔を戴けば。百節の骨頭より。焔々たる火を出だす。或時は。焦熱大焦熱の。焔に咽び或時は。紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられ鐵杖頭を砕き火燥足裏を焼く（中略）霰玉散る。足踏はとうとうと。手の舞笏拍子。打つ音は窓の雨の。震ひ戦き立つつ居つ。（一・三六五）

○釼碓地獄のくるしみはさもすさまじき（中略）劔樹地ごくのくるしみはてつせきをたつこと一由旬。劔をひつしと植ならべ（中略）骨はみぢんにくだかれて。風に木の葉のごとく也。火盆ぢごくの。有様は。かうべに火煙をいたゞけは。百節の骨頭よりゑん〳〵たる火を出す。有時は焦熱大焦熱のほのほにむせび有時は。ぐれん大ぐれんの氷にとぢられ。火槍あなうらをやき足踏はとう〳〵と。手の舞尺拍子打ツ音は。窓の前の立つゐつ。〈傾城無間鐘・第四〉

『善知鳥』

●親は空にて血の涙を。降らせば濡れじと菅蓑や。笠を傾けここかしこの。便りを求めて隠れ笠。隠れ蓑にもあらざれば。猶降りかかる。血の涙に。目も紅に染み渡るは。紅葉の橋の。鵲か娑婆にてはうとうやすかたと（一・三九二）

○袖のたきつせちの涙。ふらせばぬれじとすかみのや。かさをかたぶけ爰かしこに。たよりをもとめてかくれがさ。かくれみのにもあらざれば。なをふりかゝるちの涙に。めもくれないにそめなすは。もみぢ笠とや名もしるき〈仏

法舎利都・第四〉

○【参考】こたつふとんをかくれみのかくれ笠共ひつかぶり。にげんとするを〈傾城国性爺・第三〉

●冥途にしては。化鳥となり罪人を追つ立て鉄の。嘴を鳴らし。羽をたたき銅の爪を。磨ぎ立てては。眼をつかんで肉を（一・三九三）

○愛着の化鳥と成リ砂を追立。鉄のはしをならし羽をたゝき。銅の爪をとぎたてゝはせめて思ひをはらさんと。〈花山院都巽・第四〉

『采女』

●運ぶ歩みの数よりも。運ぶ歩みの数よりも。積る桜の雪の庭。（一・三九八）

○【参考】はこぶあゆみのかずよみていつゝわたせるはしいたの。〈鎌倉尼将軍・第四〉

●更闌け夜静かにして。四所明神の宝前に。（一・三九八）

○【参考】既に更たけ。夜静に。くるまきの井もねるころと。〈頼光新跡目論・第四〉

●桂の黛丹花の唇（一・四〇三）

○【参考】たんくはのくちびるかつらのまゆ霞をふくめる花のすがた〈本朝五翠殿・第一〉

●浅香山。影さへ見ゆる山の井の。浅くは人を思ふかの。（一・四〇八）

○【参考】なりがよふてきよふてあふみすげがさ。山の井の。あさくはものを。思ひねの。〈鎌倉尼将軍・第四〉

『鱗形』

●一張の弓の勢ひ月心にあり。（一・四五一）

○こゑはり上。一張の弓のいきほいたり。〈東山殿室町合戦・第三〉

○真たゞ中に射あつること。一張のゆみのいきほひたり。〈傾城無間鐘・第一〉

『江口』

●世の中を厭ふまでこそかたからめ。仮の宿りを惜しむ君かなと詠じけんも。（一・四七六）

○【参考】世の中をいとふ迄こそかたからめかりのやどりを。何おしむらん。げに人間の一しやうは〈日本傾城始・第三〉

●月澄み渡る河水に。遊女の謡ふ舟遊び。月に見えたる、不思議さよ（一・四八一）

○みなれ棹。遊女のうたふ舟遊びさゝら波立〳〵〈日本傾城始・第四〉

●言はじや聞かじむつかしや（一・四八三）

○おのれとさはぐ村すゞめ。いはじやきかじむつかしと合の障子をはたと立。〈三輪丹前能・第四〉

●紅花の春の朝。紅錦繡の山粧ひをなすと見えしも。夕の風に誘はれ紅葉の秋の夕。黄纈纈の林。（一・四八四）

○こうくわのはるのあした。こうきんしうの山よそほひをなすと見へしも。夕の風にさそわれこうようの秋もいつしかに。〈鎌倉尼将軍・第四〉

●罪業深き身と生まれ。殊にためし少き河竹の流れの女となる。前の世の報いまで。思ひやるこそ悲しけれ（一・四

八四）

○【参考】罪業なをしおそろしき。うきふししげき川竹の。流の女さきの世を思ひやるこそかなしきに。〈新百人一首・第四〉

●松風蘿月に言葉をかはす賓客も。去つて来る事なし。翠帳紅閨に。枕をならべし妹背もいつの間にかは隔つらん。（一・四八五）

○すいちやうこうけいに枕ならべしいもせも。つとめのならひあだなれば。いつのまにかは。へだゝりぬ。松風らげつに。ことはをかはすひんきやくは。いつもかくぞと思召し。さつて来り給ふまじ。〈三井寺開帳・中〉

○松風羅月に詞をかはすひんかくも。さつて来ることなしすいちやうこうけいに。枕をならべしいもせもいつの間にかはへだつらん。此たびのお物入。〈山桝太夫葭原雀・第二〉

●面白や実相無漏の大海に。五塵六欲の風は。吹かねども随縁真如の波の。立たぬ日もなし（中略）白妙の白雲にうち乗りて西の空に、行き給ふ（一・四八五）

○波もあはれ世にあはばやおもしろや。実相むろの大海に。五ぢん六欲のかぜは。ふかね共随縁真如の波の。たゝぬ日もなし是迄なりと。白雲に乗てかたちはうせしとかや。〈日本傾城始・第四〉

『兼平』

●げに御経にも如度得船（中略）浮世を渡る柴舟の。乾されぬ袖も水馴棹の。（中略）さん候皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べしまづ向ひに當つて大山の見えて候は比叡山候か（一・七一八）

○げに御経にもによどとくせん。（中略）とく〳〵召れ所から名もさゞ浪のみなれざほ。（中略）いかに旅人聞給へ。先あれにつゞくは日吉山王下に坂もと中にもあの。白き鳥のおゝくむれゐるは八王寺の宮。〈傾城国性爺・第四〉

●さてあの比叡山は。王城より艮に当つて候よなうなかなかの事それわが山は。王城の鬼門を守り。悪魔を払ふのみならず一仏乗の嶺と申すは。伝へ聞く鷲の御山を象れり。又天台山と号するは。震旦の四明の洞をうつせり。伝教大師桓武天皇と御心を一つにして。延暦年中の御草創。わが立つ杣と詠じ給ひし。根本中堂の山上まで。残りなく見えて候（中略）ありがたや一切衆生悉有仏性如来と聞く時は。我等が身までも頼もしうこそ候へ仰せの如く仏衆生通ずる身なれば。お僧も。われも隔てはあらじ。一仏乗の峰には遮那の梢を並べ麓に止観の海を湛へ又戒定慧の三学を見せ三塔と名づけ人はまた一念三千の。機を現して。三千人の衆徒を置き円融の法も曇りなき。月の横川も見えたりや。さて又麓はさゞ波や。志賀辛崎の一つ松。七社の神輿の御幸の、梢なるべし。さゞ波の水馴棹こがれ行く程に。（一・七一九）

○左大臣清平公さんけいの諸人にむかひ。しやくりのべての給ふやう。そも〳〵此ひえい山と申せしは王城の鬼門をまもり悪魔をはらふのみならず。一仏乗の嶺と申。鷲の御山をかたどれり。又天台と号するは四明の洞を移なり。（中略）有がたや一切衆生。しつう仏性如来と聞時は。女人の身迄も頼もしや。嶺には。しやなの梢をならべ。ふもとにしくはんの海をたゝゑ又。戒定会の三かくを見せ。三たうと名付人はまた。一念三千の。気を顕して三千人の衆徒を置。円融の法もくもりなき月の横河も見えたり。扨又麓はさゞ波や志賀辛崎の一つ松。国我安全長久のよはひを見するしるしの松。あら有がたやとゑんぜつ有御手を合させ給ひけり〈愛護若塒箱・第五〉

『通小町』

●拾ふ木の実は何々ぞ拾ふ木の実は何々ぞ（中略）苧生の浦梨なほもあり榛香椎真手葉椎。大小柑子金柑。あはれ昔の恋しきは（二・七六四）

○みだれ心や狂らん。ひろふ木の実は。何〳〵ぞ。いちゐかしいまてばしいはしばみ。松の実なつ過秋も末ひろの。扇ににたるいてうの実。〈小野小町都年玉・第五〉

○それがならずばいちゐかしゐましゐの木。大小柑子きんかんなどても。くるしからぬよの。〈富仁親王嵯峨錦・第四〉

●わが思ひ。重きが上の小夜衣。重ねて憂き目を三瀬川に。〈二・七六七〉

○そのいましめもふかからん。おもきがうへの。さよ衣たとへて。いはゞにごり江に。月のやどらぬ。ごとく也〈三輪丹前能・第四〉

○【参考】おもきが上のさよ衣重んことはほゐならず。〈小野小町都年玉・第三〉

○【参考】恋風さはぐふるい声おもきがうへのさよ衣。よこ槌殿が女がたきとねたみ給ふとなんとせう。〈八幡太郎東初梅・第一〉

●月には行くも暗からず（中略）さて雨の夜は目に見えぬ。鬼一口も恐ろしや（二・七七〇）

○月には道もくらからぬまた雨のよは目に見へぬ。鬼一口もおそろしき人めしのびてこよひも又車のもとへ来りしが。〈小野小町都年玉・第一〉

●山城の木幡の里に馬はあれども君を思へば徒歩跣足（二・七七〇）

○【参考】通ふ程に〳〵。こわたの里に馬はあれど君を思へば三枚がた。雨の夜も。〈小野小町都年玉・第三〉

○【参考】山しなの里におめしの馬はあれど。君もかちじと乗物をおりめだか成御きん衆。〈山桝太夫恋慕湊・第一〉
○【参考】山城の木幡の里に馬はあれど君を。思へはかちはだし。扨其姿はみのに笠〈富仁親王嵯峨錦・第四〉

『花月』

●さてくわの字はと問へば。春は花夏は瓜。秋は菓冬は火。因果の果をば末後まで。(二・一〇〇二)
○実面白や老楽の春は。咲花夏はうり。秋は木の実や冬は火に。楽つきず諸共に。いたゞく雪も万代を。いくことぶきしいもとせの。〈八幡太郎東初梅・第四〉
●異国の養由は。百歩に柳の葉をたれ。百に百矢を射るに外さず。われは又花の梢の鶯を。(二・一〇〇四)
○彼養由が柳の的。百に百矢をはづさずして古今無双の手たれと聞。〈八幡太郎東初梅・第二〉
●さてこそ千手の誓ひには。枯れたる木にも、花咲くと今の世までも申すなり(二・一〇〇六)
○【参考】枯たる木にも花咲との。せい願疑ふことなかれ〈坂上田村麿・第四〉
●讃岐には松山降り積む雪の白峰。さて伯耆には大山さて伯耆には大山。丹後丹波の境なる鬼が城と、聞きしは天狗よりも恐ろしや。さて京近き山山さて京近き山々。愛宕の山の太郎坊。比良の峰の次郎坊。名高き比叡の大嶽に。(二・一〇〇八)
○此身もともに降うづむ雪の白みね。さがみ坊。つゞいて三ほの。羽衣坊。はこねの山には飛行坊きのぢ八き山みたらい山。霞がくしの霧太郎せんだいにはいづなの三良扨京近き山々にそびへてかゝる村雲は。月のあたごの太郎坊ひえの山の三郎坊。によいがたけには鬼かげ坊きぬ笠山にしやぢく坊。其外高山霊がくの大天く又小天狗。〈末廣十

二段・第一〉

●葛城や。高間の山。山上大峰釈迦の嶽（二・一〇〇九）

○【参考】是は葛城や高間の山の嶺の雲の。〈新板兵庫の築島・第三〉

『草子洗小町』

●小町が相手には黒主を御定め候ひて。水辺の草といふ題を賜はりたり。面白や水辺の草といふ題に浮かみて候はいかに。蒔かなくに何を種とて浮草の。波のうねうね生ひ茂るらん。（二・一一八三）

○水のほとりの草といふ題に心を思ひよせ。読る歌にはまかなくに何を。種とてうき草の。波のうねくく。おひしげる覧。〈冨仁親王嵯峨錦・第四〉

○思はずうつす水かゞみ何をたねとてうき草の。浪のうねくこゞなりていさゞ小ゑびの。つれもろこ。〈甲陽軍鑑今様姿・第四〉

●ほのぼのと。明石の浦の。朝霧に。島隠れ行く。舟をしぞ思ふ（二・一一八七）

○【参考】ほのくと。あかしのうらの朝ぎりに。島かくれにし身なれども。君にひかるゝ。恋のつな。〈三輪丹前能・第四〉

●一字も変らで詠みたる歌（二・一一九一）

○【参考】よくく見れば同し歌。一字もかはらず有ければ。貫之もあきれはて〈小野小町都年玉・第二〉

『桜川』

●おことの国里はいづくの人ぞ（中略）唯一人ある忘れ形見の緑子に生きて離れて候程に。思ひが乱れて候（二・一二三二）

○【参考】此子が母はいづくにぞ。わすれ形見のみどり子が余りにこがれしとふゆへ。〈信田森女占・第四〉

●まこと散りぬれば。後は芥になる花と。思ひ知る身もさていかに。（二・一二三六）

○【参考】此世から成三瀬川。ちればあくたのあだ桜。身の成果の悲しやと。〈傾城無間鐘・第四〉

●今はさきだたぬ悔の八千度百千鳥。花に馴れ行くあだし身は。（二・一二三七）

○【参考】さりとては。くいのやちたびもゝち鳥。なくもなかれずかなしやと〈鎌倉尼将軍・第二〉

○【参考】くいの八千たびくやみても帰らぬ。道の露霜と〈鎮西八郎唐土船・第三〉

『猩々』

●老いせぬや。老いせぬや。薬の名をも菊の水。盃も浮かみ出でて友に逢ふぞ嬉しきこの友に逢ふぞ嬉しき（二・一三五一）

○老せぬや。〳〵薬の名をも菊の水。盃もうかひ出て友に逢ぞ嬉しき此友にあふぞ嬉しき。うかるゝ酒の源は〈坂上田村麿・第四〉

●ことわりや白菊のことわりや白菊の。着せ綿を温めて酒をいざや酌まうよ（二・一三五一）

○断や白菊の〳〵。かんをはたとあたゝめて。酒をいざやくまふよ。ハヽ〳〵〳〵〈坂上田村麿・第四〉

●よも尽きじよも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。酌めども尽きず。飲めどもかはらぬ秋の夜の盃。影も傾く入江にかれたつ。足もとはよろよろと。酔に臥したる枕の夢の。覚むると思へば泉はそのまま。（二・一三五二）

○よもつぎし。よもつぎし。万代迄の竹の葉の盃。影もかたふく入江にかれたつ。足もとはよろ〳〵と。立まふ様にみへけるが。覚ずしらずかつぱとたをれ。前後もしらずふしにけり。〈坂上田村麿・第四〉

《つづく》